

東北農業経済学会 Newsletter ♡ 2018 秋号

新会長就任挨拶

学会の発展に向けて初心忘るべからず

東北農業経済学会 会長 伊藤房雄（東北大学）

第54回東北農業経済学会秋田大会（2018年8月）の理事会にて会長を仰せつかりました。これから2年間、東北農業経済学会の発展に向けて鋭意努力して参りますので、会員の皆様のご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します。

想い返すと1991年4月に東北大学農学部農業経営学講座助手に着任後まもなく、前任助手の秋山先生（宇都宮大学）から、「この研究室の助手二人が東北農業経済学会の事務局をすることになっているから…」と言われ、それから約8年なんの疑問も持たずに会員と会費の管理をはじめ、学会誌の編集や学術会議への団体登録に向けた組織改革、等々を担当しました。学会事務量の増大に伴い現在は、多くの理事に学会誌担当、学会賞担当、企画担当、総務担当、会員及び会計担当、電子ジャーナル担当、広報・ウェブサイト担当を担っていただき事務局機能は分散しておりますが、当時はそのような発想も浮かばず、毎年大会開催前にはてんやわんやの大騒ぎをしていたように思います。ただ、そのことで各県の大会実行委員の方々と知己の間柄となり、そのことがその後の私のフィールド研究を進めていく上で大きな財産になったことは間違いありません。その意味で、今回会長をお引き受けするにあたり、東北農業経済学会への感謝とともに微力ながら恩返しをせねばという想いを感じております。

さて、ここで改めて述べるまでもなく、東北農業経済学会は設立当初から、「東北農業をいかにして発展させるのか」という実践的課題を、研究者のみならず行政や農協などの関係機関・関係団体、農業経営者、ジャーナリストらのみなさんと共有し、議論する「場」として展開してきました。これまでの大会シンポジウムのテーマ

一覧を眺めると、その姿勢が今日なお貫かれていることがわかります。しかし近年、大会参加者の中に農業経営者や農業を実践している方々の姿が少なくなっているように感じております。「農学が栄えて農業が減ぶ」ことなどは決してあってはなりません。いつの時代でも農業問題の解決には「現場の声」が必要不可欠です。そこで角田副会長（企画担当）に、東北の農業・農村の現場と会員、特に若手会員をつなぐ企画の立案と実施をお願いしました。

そのほかに、学会誌『農村経済研究』への投稿が年々増加しておりますが、そこでは論文の「品質の向上」を怠ってはなりません。この点については経験豊かな鶴川副会長（学会誌担当）に一任しております。学会賞の充実についても同様です。こちらについては宮路副会長（学会賞担当）に一任しております。さらに、各担当理事の負担を軽減するとともにより効率的で機能的な学会運営のあり方は不断の検討事項です。こちらについては中村総務担当理事に検討をお願いしました。

最後に、各担当理事に気持ち良く業務を進めていただく環境づくりも会長の役割の一つと認識しております。東北農業経済学会のミッションを遂行していくとともに、さらなる発展に向けて、会員のみなさまのご理解とご協力を賜れますようお願い申し上げます。

第54回 秋田大会報告

2018年8月24、25両日にわたり、第54回大会（秋田大会）が開催されました。初日の大会シンポジウムは秋田市の秋田県庁第二庁舎を会場に行われました。テーマは昨年の山形大会からの続編となる「東北水田農業の近未来 パート2 一攻めの農業と地域農業を俯瞰する一」でした。長濱健一郎会員（秋田県立大学）、森田明会員（宮城大学）の座長のもと、以下4報告がなされました。第1報告「米流通と生産調整の展望」伊藤亮司会員（新潟大学）、第2報告「水田土地利用型農業の担い手の将来像」椿真一会員（愛媛大学）、第3報告「地域農業とJAの役割」高橋徹氏（JA秋田しんせい）、第4報告「農

業法人の展開と地域」中村勝則会員（秋田県立大学）。

これら報告に対して、冬木勝仁会員、渡部岳陽会員、荒井聡会員がコメントし、多くの論点が提示されました。これに参加者から出された質問を加え、総合討論では活発な意見交換が展開されました。シンポジウム後にはルポールみずほを会場として懇親会が開催され、会員相互の交流が深められました。

翌日の個別報告は、秋田県立大学秋田キャンパスにおいて行われました。5会場で計36本の報告がなされました。これは過去最多となります。本学会が研究成果の発表の場として積極的に活用されていることを示すものです。なお、今回は20名の方々に座長をお引き受けいただきました。ご協力をいただきましたこと、感謝申し上げます。

大会参加者は129名と、盛会のうちに終えることができました。会員の皆様のご支援、ご協力に感謝申し上げます。なお、今大会は秋田県および秋田県立大学から共催いただくとともに、秋田県農協中央会からご後援いただきました。これら機関からは実行委員や当日スタッフ派遣、協賛品のご提供などご協力を賜りました。この場を借りて深く感謝申し上げます。

秋田大会実行委員長 長濱健一郎（秋田県立大学）

役員会・総会報告

秋田大会の開催に併せて2018年8月23日（木）に役員会が、翌8月24日（金）に総会がそれぞれ開催されました。主な内容は次の通りです。

1. 2017/18年度の活動について

（1）会員数の動向

2018年7月31日現在 個人会員236名

（うち一般会員206名、学生会員30名）

団体会員 4団体

（2）2017/18年度 事業報告

2017年

11月 ニュースレター2017年秋号発行

2018年

3月 2017/18年度 第1回常務理事会開催（東北大学農学部、16日）

農村経済研究 第35巻第2号（論文特集号）発行

5月 ニュースレター2018年春号発行

2017/18年度 学会賞候補者募集

2018/19年度 研究助成募集

8月 2017/18年度 第2回常務理事会開催（東北大学農学部、2日）

第54回 秋田大会開催（秋田市、24-25日）

2. 2016/17年度学会賞の選考結果について

次の記事をご覧ください。

3. 2017/18年度研究助成対象者選考結果について

東北大学の石塚会員、唐会員の2名への助成が決定。

4. 名誉会員への推挙について

渋谷長生前学会長を名誉会員に推挙することで決定。

5. 会長・副会長選出の手続きに関する申し合わせについて

以下のとおり選出手続きを申し合わせる（2018年8月23日から施行）。

- ・ 次期理事候補者が総会で承認された後、現会長は速やかに新理事会を招集する。
- ・ 新理事会には、現会長と現庶務担当理事及び現事務局担当が同席する。
- ・ 新理事会の司会は現会長が行い、現庶務担当理事及び現事務局担当理事が事務的な補佐をする。なお、現会長、現庶務担当理事、現事務局担当理事は新理事会において議決権を持たない。
- ・ 現会長が新会長・新副会長の選出方法を提案し、それに基づいて新会長を選出する。

6. 2018/19年度事業計画について

以下の内容で承認されました。

- ・ 団体会員の拡充対策
団体会員への呼びかけ文書に基づき、県担当理事を通じて交渉。各県、農協中央会、土地連、農業共済組合、農業会議、農業公社へ送付。
- ・ 農村経済研究発行
第36巻第1号（山形大会特集）
第36巻第2号（論文特集）
- ・ 宮城大会プレ・シンポジウム（企画担当理事と宮城県選出理事と相談の上、必要に応じて開催）
- ・ 第55回 宮城大会開催
- ・ 2018/19年度 学会賞表彰
- ・ 2019/20年度 研究助成の募集
- ・ ニュースレター発行（2018年10月下旬、2019年5月中旬＝宮城大会案内を同封）
- ・ 常務理事会開催（2018年2～3月、2019年7月下旬～8月上旬）
- ・ J-STAGE への論文掲載
- ・ 会員名簿作成（前年度から持ち越し）

2017/18 年度学会賞

2017/18 年度東北農業経済学会賞（木下賞）奨励賞および学会誌賞は、以下のように決定しました。受賞理由は以下のとおりです。秋田大会にて開催された総会において表彰式が行われました。

1. 学術賞

- ◆受賞者：磯島 昭代 氏（東北農業研究センター）
- ◆受賞対象：『果物の贈答マーケティングに関する研究』
- ◆受賞理由：受賞者は、東北農業において重要な部門である果樹を取り上げ、その販売戦略として贈答用果物の直接販売に注目し、主に消費者調査による分析から具体的な果物のマーケティング方策を提示している。具体的には、統計調査分析を通して贈答用果物の主要な販売ターゲットは果物生産地の地元消費者であることを明らかにし、さらに、果物生産地の地元消費者への調査・分析からリンゴに対する評価構造、贈答意識と購買行動を明らかにした。また、地元消費者以外への顧客拡大方策についても検討し、贈答用果物の顧客拡大プロセスを明らかにしている。これらの調査・分析に基づき新規顧客を獲得するためのツールとして「おすそわけ袋」を考案し、実際の生産者による活用を通してその効果の検証にも取り組んでいる。これらの業績は、「おすそわけ袋」の活用が自治体の果樹農業振興計画の中で検討されるなど、学術面のみならず、生産現場への具体的な貢献も期待されるものである。また、対象業績は、東北農業経済学会誌に掲載された一連の論文をベースに取り纏められたものであり、東北農業経済学会への貢献も大きく学術賞の授与に相応しいものである。

2. 奨励賞

- ◆受賞者：成田 拓未 氏（弘前大学）
- ◆受賞対象：「りんご等青果物の国内外の流通問題に関する研究」
- ◆受賞理由：受賞者は、東北農業の主要な品目の一つであるりんご等、青果物の国内外の流通問題に関する研究に精力的に取り組む、多くの研究業績を発表している。りんごについては、国内の農協共販での新たな物流システムの構築による有利販売の実態を明らかにした他、りんごの輸出実態から、今後の課題、対応策を示している。さらに、主要な輸出先の一つである中国でのりんご消費

の実態を明らかにするなど、今後の輸出振興への重要な知見を示している。また、輸入による原料調達の視点から加工用トマトの調達問題などにも取り組むなど、青果物の国内外の流通問題の解明に積極的に取り組んできた。これらの研究業績は、業界誌や生産者向けの講演会などを通して広く生産現場へも還元されている。この様に、受賞者は、東北農業の発展に大きく寄与しうる研究活動を実践している他、今後のさらなる発展も期待され、奨励賞の授与に相応しいものである。

3. 学会誌賞

2017 年度学会誌賞候補論文は、第 35 巻第 1 号及び第 2 号に掲載された論文 18 本を対象に選考した結果、以下の二つに決定しました。

学会誌賞①

- ◆受賞者：長谷川 啓哉 氏（東北農業研究センター）
- ◆対象論文：「ジュース原料用リンゴ生産による大規模リンゴ作経営の成立可能性」（第 35 巻第 2 号）
- ◆受賞理由：本論文は、近年増大している国内加工向けリンゴ需要に注目し、加工向けリンゴ生産を主として行う大規模リンゴ作経営が成立するかを検証したものである。青森県における詳細な実態分析から加工向けリンゴ生産は省力的で高い生産性を有していることを明らかにした。また合わせてリンゴ作専作では大規模経営が成立することは困難であることも指摘している。このように今後のリンゴ作経営の一つの展開方向と課題を示した点が実践的な意義を有していることが高く評価された。

学会誌賞②

- ◆受賞者：宮武 恭一 氏（農研機構中央農業研究センター）
- ◆対象論文：「機械除草による有機稲作の可能性と課題」（第 35 巻第 1 号）
- ◆受賞理由：これまで有機稲作は、除草作業に多くの労働時間を要する等の問題が、普及を妨げている大きな要因と考えられてたが、近年では「機械除草機」を導入し、大規模経営でも一部有機稲作を導入する事例が見られている。本論文は、100ha 規模の稲作経営を対象に、労働時間や生産コスト等を丹念に分析し、大規模な有機稲作の可能性を検討した。機械除草により有機稲作の労働時間は、一般経営と同程度まで削減される。また有機稲作の単収は低くなるものの、消費者からの評価が高く、米の販売上プラスの効果があり、損失がカバーされていること等を明らかにした。こうした知見は、近年大規模

化が進む東北水田農業の展開にとっても、示唆に富むものであり、優れた論文として評価された。

受賞者のことば

このたびは東北農業経済学会木下賞（学術賞）という名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。受賞対象となりました拙著『果物の贈答マーケティング』は、構成する第1章から第7章まで全て本学会の学会誌に掲載された論文をもとに執筆されました。特に第2章のもととなった「自家消費用および贈答用リンゴに対する消費者ニーズの解明－評価グリッド法による接近－」は、本学会に初めて投稿して学会誌賞をいただいた記念すべき論文でもあります。この論文をスタートに7年間、毎年1編ずつ投稿させていただきました。昨今のめまぐるしく変化する研究環境の中で、7年間も好きな研究に取り組めたことは全く幸運でしたが、何よりも、一連の論文を辛抱強く掲載してくださったこの学会の大きさ、懐の深さがあったからこそ、研究を続けることができたと考えております。レフリーの先生方、編集委員をはじめとする学会関係者の皆様には改めて深く感謝申し上げます。この受賞をきっかけとして、本書の成果とともに、本学会の素晴らしさが広く認知されることになれば幸甚に存じます。

磯島 昭代（農研機構東北農業研究センター）

この度は東北農業経済学会木下賞（奨励賞）を賜り、誠に光栄に存じます。小職は、大学院在籍時より、りんごを主とする青果物の流通問題に関心を持ち、学位論文「農協共販の物流過程に関する研究」の執筆と、大学院修了後、中国の青島農業大学に奉職する機会を得たことをきっかけに、研究対象を、中国及び東アジアにおける青果物流通問題、そこでの協同組合の役割、貿易問題へと広げてきました。これらの研究の一部は、農村経済研究に掲載いただいています。論文審査の過程で多くのご助言を頂いた先生方には、この間大いに鍛えていただきました。奨励賞にかかるご推薦、ご審査をいただいた先生方も含めて、この場を借りて、心より御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、微力ながら今後なお一層、地域農業の将来に貢献できる研究を心がけていく所存です。今後とも、何卒よろしくお願いいたします。

成田 拓未（弘前大学）

この度は東北農業経済学会賞木下賞（学会誌賞）をいただき、心より光栄に存じます。2017年秋から企画部門に異動になったため、授賞式に参加してお世話になっていない皆様にお礼を申し上げることができず失礼いたしました。受賞対象となりました研究は、茨城県の大規模法人の事例を対象に、米の有機栽培の作業時間や生産コストを機械除草と紙マルチという方式別に明らかにするとともに、経営内での有機米の位置づけをマーケティングミックスやバリューチェーンの考え方で整理したものです。有機稲作については、山形県や新潟県でも活発な取り組みが行われていますが、そうした取り組みを分析する際のたたき台にいただければと思っています。なお最近、私も農研機構の農業経営研究部門では若手研究員を次々採用しているため、彼らが本学会でも活躍できるよう、しっかりサポートしていきたいと思っています。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

宮武 恭一（農研機構中央農業研究センター）

このたびは第35回東北農業経済学会木下賞（学会誌賞）を賜り、誠にありがとうございました。大変光栄です。学会誌賞はありがたくも今回2度目の受賞ですが、前回は神田健策先生、今回は小沢互先生と尊敬し、敬愛するお二人の先生のお名前で学会賞を賜れましたこと、大変嬉しく存じます。農業を巡る環境変化に伴い、農業経営経済研究を取り巻く状況も大きく変わる中ではありますが、新たな事象を発見し、それを論理化し、論文として世に問う研究という営み自体に喜びを見だし、これからも邁進していきたく存じます。東北農業経済学会会員各位とは是非協力して研究に臨ませて頂ければありがたく思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

長谷川 啓哉（農研機構東北農業研究センター）



磯島会員

成田会員

長谷川会員

※2018.8.24 授賞式にて（宮武会員はご欠席）。

会長退任のあいさつ

先の秋田大会で学会長を終わることができ、学会員、行政・団体関係者、食や農に関わり調査や聞き取りにご協力頂いた皆さまに、厚くお礼申し上げます。1989年に学会員となり、2002年から編集担当理事として3期6年、2008年から副会長として4期8年、そして2016年から学会長を務めさせて頂きました。

財団法人農林統計協会で煮詰まりつつあった時に、東北大の酒井先生、当時秋田県立農業短期大学にいた工藤先生のご厚意で秋田県立農業短期大学に転職させて頂き、研究者をスタートしました。博士課程を経験していなかった者にとって、右往左往する状況でしたが、1989年山形大会、1990年秋田大会に参加することで大学教員として、研究者として、学会員として、「やるべきこと」みたいなものを理解できたように思います。

その後、分野を問わず「学会のあり方」について議論されるようになったこともあり、東北農業経済学会も全ての実務を東北大学に依存していた体質を改善することになり、O氏とT氏が庶務担当理事と学会誌担当理事を担当することとなり、実務も幅広い人材が担うこととなったと記憶しています。ここで予想外の事態が起き、まず庶務担当理事だったO氏が西日本に異動することとなり、同じ職場にいるということで後任の打診を受けました。これについては「そんな無理です」とお断りしたのですが、まもなく他大学のT氏がやはり西日本に異動され、それに際して後任の打診がありました。さすがに2度断るのは学会員としていかなものかと考えたような考えないような状態で「了解」をしたのが2002年だったように思います（O先生、T先生、了解を得ず恨み節を書いたことをお許し下さい）。そこから8期16年間常務理事を務めさせて頂いたということになります。

編集担当理事の時は、毎年「学会誌を予定通り発刊する」ことを目標に掲げ、結局守ることができませんでした（近年はだいぶ正常化されており、2008年以降の歴代編集担当理事の皆さんの頑張りに感謝しています）。学会誌賞が設立され、その責任副会長として編集委員の皆さんとともに掲載論文の評価を行ったこと、報告論文と投稿論文のダブルスタンダードではという指摘に対して垣根をなくして対応したことなど編集にまつわる思い出が多くできたことは思い出深いものです。

他の担当をしていないので軽々しく言えませんが、編集を担当するということは学会員の取り組みがなんとなく分かるという利点があり、大変ではありましたが、だいぶ良い機会を頂けたと感謝しています。

その上、私が研究者となって過ごした秋田県と山形県で大会を行う2年間、学会長をさせて頂いたのはすごいご褒美をもらったような気がしています。

学会の仕事はボランティアではあるのですが、その中でいろいろな役割を担うことで得た人とのつながりは、私にとって仕事の上で何にも代えがたいものでした（実は私的な部分でさらに代えがたいものになっていますが・・・）。このようなことから、是非多くの会員の皆さんに主体的に学会に関わって頂ければと願ってやみません。

このような挨拶の場を頂き、感謝いたします。

前東北農業経済学会長 小沢 亙（山形大学）

論文投稿のご案内

編集委員会では、多くの会員の皆さんからの論文投稿をお待ちしています。原稿は和文・英文どちらでも結構です。分量は和文で最大22,000字（印刷頁数で12頁）が目安です。詳細については学会ホームページの「会則・規程」の『農村経済研究』投稿規程をご覧ください。投稿先、問い合わせ先は以下の通りです。

東北農業経済学会『農村経済研究』

編集担当理事 川島 滋和 あて

宮城大学食産業学部

〒982-0215 宮城県仙台市太白区旗立2丁目2-1

TEL 022-245-1257 FAX 022-245-1534

E-mail kawashim@myu.ac.jp

編集後記

◆発行が遅くなりまして大変申し訳ございません。また、都合により「会員のよこがお」は、お休みさせていただきます。◆役員（理事・幹事・評議員・顧問）の改選が行われ、新たな体制となりました。次頁に一覧を掲載しております。任期は2年です。よろしくお願い申し上げます。◆次号2019年春号は来年5月頃の発行を予定しております。（N）

東北農業経済学会理事・監事・評議員・顧問

任期：2018年9月1日～2020年8月31日

役職	選出枠	担当	常務理事	県担当	氏名	所 属
理事	宮城	会長（研究助成担当兼務）	○	○	伊藤 房雄	東北大学
理事	秋田	副会長（学会誌担当）	○	○	鶴川 洋樹	秋田県立大学
理事	山形	副会長（企画担当）	○		角田 毅	山形大学
理事	農研	副会長（学会賞担当）	○		宮路 広武	東北農業研究センター
理事	宮城	学会誌編集担当	○		川島 滋和	宮城大学
理事	秋田	庶務担当	○		中村 勝則	秋田県立大学
理事	会長指名	事務局・会計担当	○		水木 麻人	東北大学
理事	会長指名	庶務担当			上田 賢悦	秋田県立大学
理事	会長指名	広報・Web管理担当			小山田 普	東北大学
理事	会長指名	学会誌編集事務担当			藤科 智海	山形大学
理事	会長指名	学会賞事務担当			安江 紘幸	東北農業研究センター
理事	会長指名	電子ジャーナル担当			吉仲 怜	弘前大学
理事	青森			○	石塚 哉史	弘前大学
理事	岩手			○	新田 義修	岩手県立大学
理事	山形			○	須藤 英弥	山形県立農林大学校
理事	福島			○	新妻 俊栄	福島県農業総合センター
理事	新潟			○	伊藤 亮司	新潟大学
理事	青森				泉谷 眞実	弘前大学
理事	岩手				佐藤 和憲	岩手大学
理事	宮城				大和田 祥代	宮城県環境生活部
理事	福島				荒井 聡	福島大学
理事	新潟				清野 誠喜	新潟大学
理事	新潟				塩谷 幸治	中央農研 北陸研究センター
理事	農研				磯島 昭代	東北農業研究センター
理事	域外				椿 真一	愛媛大学大学院
理事	域外				福田 竜一	農林水産政策研究所
理事	域外				藤井 吉隆	愛知大学
理事	域外				宮入 隆	北海学園大学
監事					木谷 忍	東北大学
監事					柘植 徳雄	東北大学
評議員	青森				成田 智昭	青森県産業技術センター農林総合研究所
評議員	青森				成田 高	青森県農協中央会
評議員	青森				山田 泉	青森県農林水産部
評議員	岩手				及川 浩一	岩手県農業研究センター
評議員	岩手				照井 仁	岩手県農協中央会
評議員	岩手				中村 英明	岩手県農林水産部
評議員	宮城				竹中 智夫	宮城県農協中央会
評議員	宮城				伊藤 吉晴	宮城県農林水産部
評議員	宮城				秋山 憲孝	農林水産省東北農政局
評議員	秋田				近藤 悦応	秋田県農協中央会
評議員	秋田				齋藤 正和	秋田県農林水産部
評議員	山形				後藤 雅喜	山形県農協中央会
評議員	山形				結城 和博	山形県農林水産部
評議員	山形				高橋 哲史	山形県農林水産部
評議員	福島				川上 雅則	福島県農協中央会
評議員	福島				沢田 吉男	福島県農業総合センター
評議員	福島				柏倉 一司	福島県農林水産部
評議員	新潟				小林 巧	新潟県農林水産部
評議員	新潟				高橋 尚紀	新潟県農協中央会
顧問					鈴木 良典	農林水産省東北農政局